

令和6年度第1回フードサプライチェーンにおける脱炭素化の実践と
その可視化の在り方検討会 議事概要

日時：2025年1月22日（水）10:30～12:30

場所：AP 新橋 RoomD（対面・Web ハイブリッド開催）

出席委員：

□会場対面出席

座長 齋藤 雅典

東北大学 名誉教授

委員 荻野 暁史

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構

畜産研究部門高度飼養技術研究領域 スマート畜産施設グループ長

委員 草 明生

全国農業協同組合連合会

畜産総合対策部 統轄課 畜産サステナビリティ推進室 室長

委員 清水 康男

明治ホールディングス株式会社

サステナビリティ推進部 環境グループ長

委員 中野 勝行

立命館大学 政策科学部 准教授

委員 鳴海 洋一

日本ハム株式会社 経営企画本部 サステナビリティ部
プロモーター

委員 西尾 チヅル

筑波大学 副学長兼ビジネスサイエンス系 教授

委員 夫馬 賢治

株式会社ニューラル 代表取締役 CEO

国立大学法人信州大学 グリーン社会協創機構特任教授

□WEB 出席

委員 宮澤 正紀

イオントップバリュ株式会社

戦略本部 副本部長兼環境推進室長

■座長選任

齋藤委員が座長に選任された。

(1) 今年度の取組方向(案)

(2) 昨年度の検討会における御意見と対応方針(案)

(3) ガイドライン改定に関する事項

① ガイドライン策定後の動きについて

② ガイドライン策定後の課題について

議事(1)～(3)を説明。各委員より以下の意見があった。

- 昨年3月の本格運用以降、見える化の取組が生産者・消費者の両者に浸透してきている実感がある。みえるラベルの表示について、ガイドラインの策定・管理が目的ではなく、GHG削減を生産者・消費者に伝えることが重要である。そのために、消費者の行動変容につながる表示方法についてナレッジの収集、追求が必要と考える。
- 中干し期間延長により現状の評価では生物多様性保全のラベル等級に影響はない設計になっているが、トレードオフになりそうな局面にこそ表示が併記されていることに意味があると考え。今後の展開においても両方の表示があることで生産者・消費者への安全、安心につながるように目指してほしい。
- 現在 CFP 表示についてのガイドライン策定が環境省で進められているが、その中で、消費者側の関心は、どの程度削減が進んでいるのかという点であり、その情報が重要という意見があった。また自社製品間の比較はよいが、他社製品との比較は誤解を招くという意見があり、その観点からすると、みえるらべるの評価は地域標準的な栽培方法を基にした削減貢献量の表示なのでよい評価方法であると考え。その一方で、一度等級をつけたことで終わりではなく、次年度にさらに自己努力してもらえ、かつ生産者の自己努力がみえるような制度になっていることが重要だと考える。
- P.21 のラベル表示について、併記可能な記載のイメージと認められない表示例の違いが分かりづらい印象で、少し整理が必要と考える。
- みえるらべるは国際輸送時を含む輸送の GHG 排出量を考慮しておらず、仮に輸送時はシステム境界外であると説明していたとしても、国際輸送の GHG 排出量は無視できないので、海外で表示する場合は GHG 削減に貢献しているとの表示が批判を招く可能性がある。運用時には何らかの配慮が必要と考える。
- 等級ラベルについて星3の取得が競争軸にならないよう注意が必要である。Jクレジットとの併記についてだが、他業界では「Scope 4」として削減貢献量の評価が始まっており、見える化はその流れを先取りしていることから大変良いと考える。また生物多様性保全の表示が米以外の農産物に拡大していくことを期待している。
- みえるらべるの国際的なプレゼンスを高めていくという観点から、国際会議などで積極的にアピールしてほしい。また、スコープ3カテゴリ1の算定で簡易算定シートがどのように活用できるのかということが事業者の関心事項であり、ガイドライン改定時にはその活用方法をガイダンスしてほしい。

- 簡易算定シートを実際に記入する研修は重要。生産者のほか、地域で簡易算定シートの記入をサポートできる人材の育成が必要と考える。等級表示に関連して、現在作成中の畜産についても同様の運用ができるのか検討することが重要と考える。
- 見える化研修会を事業者向けにも実施することで、更なる取組拡大が可能だと考える。また J クレジットについて QR コード表示の説明があったが、みえるらべるの情報を示す（農林水産省 HP のみえるらべるの紹介ページに遷移する）QR コードもあった方が良いのではないかと。「みえるらべる」を知らない方もいる中で、農林水産省の取組みとわかれば、認知度、信頼性が増すのではという趣旨。

(4) 畜産分野に関する事項

- ① 簡易算定シートについて
- ② 算定実証について

議事(4)を説明。各委員より以下の意見があった。

- 肥育の増進による GHG 排出量削減が見込めるとあるが、抗生物質を多用することで薬剤耐性（AMR）の観点で議論になるような風潮になるのは望ましくないため注意が必要と考える。
- データがないとすることで自給飼料の栽培に関連するものは含まれていないとのことだが、自給飼料栽培における GHG 削減効果の反映も重要な課題のため、データが取得できるように検討を進めていただきたい。
- ラベルの表示内容について、消費者への周知や教育が必要と感じた。また、生産者の削減努力の具体的内容が消費者に伝わるような事例の蓄積が必要と考える。
- 農産物同様、スコープ 1、3 に対応できる簡易算定シートを目指していただきたい。
- 算定シートに搭載されている排出原単位は IDEA の Ver2.3 であるが、最新版は土地利用改変に関する数値が利用できるため、導入を検討していただきたい。
- 乳業事業者として自社製品で算出した数値と比較してみたところ、簡易算定シートの GHG 排出量の算定結果はやや小さい数値となった。自社算定では各プロセスの最大値を採用し積算したことが要因であると考えているが、簡易算定シートは統計値等を用いた中間的な数値で算定されるということが分かった。

- 消化管由来 GHG 及び家畜排せつ物管理由来 GHG を削減するためには、飼料添加物の効果的な使用や、土地利用変化に着手しないと GHG 排出量の大きな削減にならないため、今後推進していただければと思う。
- 消費者には、どのような生産過程や削減の工夫を経て得られた等級なのかということ、畜産分野については特に知ってもらいたい。畜産物の見えるらべるの検討は、家畜の飼養管理など畜産物の生産過程一般についての消費者の理解を深める機会になると思うので、どのように消費者に伝えるかということも考えてほしい。
- 簡易算定シートの入力項目が簡素化され、入力しやすくなっている印象。引き続き実際に入力する側の意見を取り入れ、その都度、見直していく必要がある。
- 見えるらべるの海外発信ができるよう、英語表記にした際の呼称を戦略的に考える必要がある。

(5) 今後のスケジュール

- ・委員全員よりガイドラインの改定案の了承が得られたため、ガイドラインを改定し 2 月に施行する。
- ・12 月上旬から実施している畜産の見える化算定実証の結果を 2 月中旬に実施する第 2 回畜産の見える化専門家 AG に図る。

以 上